

Computer Report

Vol. 55 No. 4 4月号 (通巻 727号)

はじめの言葉

■フランス南東部で発生したドイツ旅客機墜落事故は、コックピットを離れた機長を閉め出す形で副操縦士が故意に起こしたものだといった疑いが強い。セキュリティ問題は最終的には、関与する人に帰結する問題だと改めて痛感させる事件だった。ちなみに、度重なる飛行機内での犯罪から操縦席を守るために施された安全策が災いした。情報漏えいなど情報セキュリティ上のトラブルも内部犯行者が関与している場合が多いことを彷彿させた。

■製品／商品の信頼性は、利用者の安全（セキュリティ）確保に通じる、もうひとつの製品であり、商品である。より高水準の信頼性を確保／担保するために、かつての「もの作り大国ニッポン」は、あらゆる分野で品質管理に努めてきた。世界の工場としての大部分を中国はじめ隣国周辺国に譲ってしまった現在だが、いまだに「ジャパニーズクオリティ（日本品質）」の信頼性には、高い評価が与えられている。

■日本の半導体メーカーは、何故ゆえに韓国などのメーカーに遅れをとったのかの分析に、実は「日本メーカーが高信頼性／高品質を求めすぎたからだ」という指摘があるそうだ。極論すると、5、6年の寿命があれば良いようなパソコン向け半導体でも、20年、30年もの寿命の高品質を実現してきたため、その管理コストが製造原価となり、市場競争力を失ってしまったという説である。妙に説得力がある説である。

■メインフレーム並みの信頼性確保が当たり前だと考えたこと自体、決して悪いことではない。がしかし、パソコンなど適用分野によっては、「過ぎたるは及ばざるが如し」なこともあるわけだ。「悪かろう安かろう」が歓迎される市場があるのだ。なるほど、パソコンの故障でユーザーの生命にかかわることなど滅多にない。また、数年毎に買い換えされることを想定したら、使われる半導体も数年の信頼性が確保されていけばいいのである。

■飛行機もそうだが、昨今の自動車は、電子部品の固まりである。まさにその有り様は、走るコンピュータ群である。しかもこのコンピュータ群、パソコンなどと違って、ユーザーの生命に直接関わっている。したがって、その信頼性はメインフレームよりも、より高いレベルで求められている。その部品である品質追求も同様である。その意味で、自動車向け半導体市場は、日本の半導体メーカー再生／復活の糸口になるかもしれない。

■ユーザーの生命に関わる市場と言えば、介護用ベッド、移動用器具、介護用ロボットの市場もある。この分野で利用者の信頼に答える高品質追求は、今後ますます高まるだろう。半導体メーカーはじめ「もの作りニッポン」が、ジャパニーズクオリティをいかに発揮できる時を、今再び迎えていると信じたい。特に、広義狭義のセキュリティ問題を考えることは、まさに国策としてのテーマであり、命題である。心して臨みたい。

■少子高齢化社会にあって、高齢者に多くの認知症症状が出ている。これにどう対応していくべきかは、今日の全世界的課題である。それはまた、そのまま介護現場の問題でもある。安心して暮らせる社会作りを喧伝しながら、介護用器機の不具合による死傷事故発生の脅威に曝されている。さらには介護人による老人虐待問題も報告されている。ここでもジャパニーズクオリティは問われている。（藤見）